

甲府盆地から見たヤマト（3） —甲斐鉾子塚古墳出土の円筒埴輪—

小 林 健 二

- | | |
|-------------------|-----------------|
| 1. はじめに | (1) 円筒形埴輪の分類 |
| 2. 甲斐鉾子塚古墳出土の円筒埴輪 | (2) 朝顔形埴輪の分類 |
| (1) 円筒形埴輪 | 4. 甲斐の前期古墳と円筒埴輪 |
| (2) 朝顔形埴輪 | 5. まとめ |
| 3. 円筒埴輪の型式分類 | 6. おわりに |

1. はじめに

前稿「甲府盆地から見たヤマト（2）」（以下、「前稿」とする）では、甲斐鉾子塚古墳出土の壺形埴輪を取り上げ、それまでの成果に新たな資料を加え、暫定的ではあるが型式分類を行うとともに、甲斐地域での壺形埴輪の変遷や位置づけ、さらにその背景について検討を行った（小林 2013）。この中で筆者は、畿内型の大型前方後円墳として評価される甲斐鉾子塚古墳ではあるが、壺形埴輪は周辺地域の影響を受けて甲府盆地内で主体的に生産を行っていたと考えた。

これを踏まえ、本稿では朝顔形埴輪を含めた円筒埴輪を取り上げる⁽¹⁾。前稿で若干触れておいたが、埴輪の研究史については筆者がここで詳しく取り上げるまでもなく、他稿を参照していただきたいが（車崎 2004など）、埴輪の起源や系譜に関する多くの研究を経て（上田 1959、近藤・春成 1967ほか）、1978年（昭和53）に発表されたいわゆる「川西編年」（川西 1978・1979・1988）により、円筒埴輪の研究は大きく進化（深化）し現在に至っている。この中で、甲斐鉾子塚古墳出土の円筒埴輪も時間軸（川西編年Ⅱ期）に位置付けられたが、以後、東国各地においても円筒埴輪による首長墓編年や生産・流通などについて活発に議論されるようになった。

このような動向の中、東国への埴輪の波及に関わって、甲斐地域の円筒埴輪について本格的に取り上げた橋本博文氏は、「特殊器台系譜の初期円筒埴輪」を持つ甲斐鉾子塚古墳と笛吹市岡鉾子塚古墳との間に政治的同盟関係を想定し、さらに駿河の松林山古墳、毛野の朝子塚古墳出土の埴輪との形態的・技法の類似性から、そこに畿内と東国との強い結び付きを読み取ろうとした（橋本 1976・1980ほか）。同時期の畿内の埴輪との比較や、相伴する埴輪及び副葬品との組み合わせなどから、この解釈は後に見直されることになったが（高橋 1994）、東国の初期埴輪から古墳時代の政治過程を具体的に論じたものであった。

その後、甲斐鉾子塚古墳では2次にわたる史跡整備事業

に伴い発掘調査が行われ、周知の通り多くの成果が得られている（坂本 1988ほか）。これらのうち埴輪については、後円部南側に設定した4-1号トレンチ（4-1 T：第1図）及びくびれ部付近に設定した5号トレンチ（5 T）の墳丘テラスにおいて、基部が樹立された状態で確認された。また、同じ5号トレンチからは円筒形埴輪（第4図19）、朝顔形埴輪（第5図24）、壺形埴輪の大形の破片が出土し、壺形埴輪は全体の形状が、円筒形埴輪・朝顔形埴輪については、口縁部（口頸部）から胴部凸帯（最上段）までが復元された。これらは、甲斐鉾子塚古墳、並びに当該地域を代表する埴輪として山梨県立考古博物館に展示されることとなり、後に山梨県指定文化財となっている。

しかし、それ以外の埴輪については、ほとんどが小破片であり、磨滅したものが多いため、唯一全体の形状がわかる壺形埴輪は別にして、その後の資料としての取扱いをより困難なものにさせていた。

本稿では、甲斐鉾子塚古墳出土の円筒埴輪について、これまでの報告成果に基づき、その形態的特徴を捉えることを第一の目的とする。その上で型式分類を行い、さらに当該地域における埴輪生産の動向について考えてみたい。

2. 甲斐鉾子塚古墳出土の円筒埴輪

前稿同様、まずここでは甲斐鉾子塚古墳出土の主な円筒形埴輪・朝顔形埴輪を概観しておく（第3～5図）。甲斐鉾子塚古墳で発掘調査が行われた36箇所のトレンチ（本数は45）のうち（第1図）、最も多くの埴輪片が出土した第1次整備事業に伴う調査の報告書掲載資料を中心に再実測を行うとともに、第2次整備事業に伴う調査出土の資料も含め、未報告資料については今回新たに実測を行ったが、もちろん出土資料すべてではなく、あくまでも特徴がわかる資料に限定した。

なお、円筒形埴輪、朝顔形埴輪の各部位の名称については、前稿同様先学の研究成果を参考に第2図の通りと



第1図 甲斐銚子塚古墳全体とトレンチ配置

したが（置田 1977・山根 1992・廣瀬 2001など）、胴部の破片資料については、円筒形か朝顔形かの判別が困難であることから、ひとまず円筒形埴輪として取り扱うこととする。また、基部の破片資料も報告されているものの、胴部の段数、凸帯の条数は不明であり、全体が復元できないため、ここでは取り扱わないこととする。

(1) 円筒形埴輪（第3・4図）

1は口縁部の破片資料である。単純口縁で緩やかに外反し、口縁端部は横ナデで丸味を持ち、わずかに玉縁状で、口縁部径は44cmを測る。外面には斜めのハケ、内面は横・斜めハケによる調整が確認出来るが、内面は磨滅により一部不鮮明である。色調はにぶい黄褐色⁽²⁾で、胎土には赤色粒子や金色雲母を多く含む。

2は口縁部から胴部にかけての3分の1ほどが残存する大型の破片資料で、最上段の凸帯までが残っている。1同様緩やかに外反し、口縁端部は横ナデであるが尖り、内面に平坦な面を持つ。口縁部径は48.4cmで、外面は縦ハケ、凸帯から下の胴部外面は細かい縦ハケ調整である。口縁部内面は横ハケ調整であるが1部に輪積痕が確認できる。胴部内面は横ハケ後斜めのハケ調整。貼り付けの凸帯は大きく、上辺・下辺・側面が内彎し断面がM字形を呈するもので、幅2.7cm、高さ1.8cmを測る。器壁は1.4cm前後で出土埴輪の中でも厚く、色調は明黄褐色で、胎

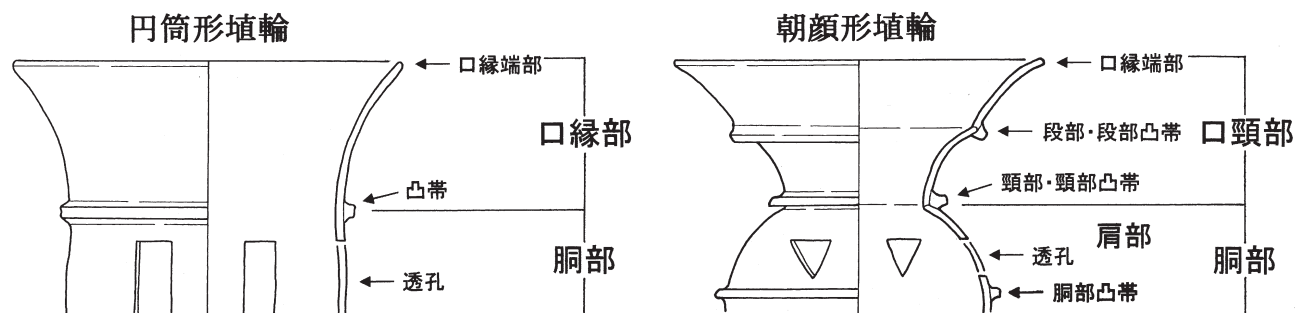
土には赤色・白色粒子、金色雲母を多く含む。

3・4は口縁部の破片資料である。3も外反口縁であるが、端部は面を持つ。外面は縦ハケ、内面は磨滅により調整は確認できない。色調は明黄褐色で、赤色・白色粒子、小石を含む胎土である。4は直線的に開く口縁部で、端部は玉縁状を呈する。外面は磨滅により調整確認不可、内面は横ハケ・ナデによる調整が確認できる。色調はにぶい黄褐色で、胎土には赤色・白色粒子、小石を含む。

5～10は胴部の破片資料である。5は磨滅により外面調整は確認できず、内面は横・斜めのハケ、ヘラナデによる調整で一部確認不可。M字形凸帯は貼り付けで幅2.6cm、高さ0.8cmで突出度は低い。色調は橙色、白色粒子、小石を多く含む胎土である。

6も胴部破片である。外面は縦ハケ、内面は横・斜めのハケによる調整で、長方形の透孔を開けているが1段あたりの孔数は不明。凸帯は突出度が高く、上辺・下辺が内彎するタイプのもので、貼り付け面の幅2.8cm、高さ1.8cmを測る。色調はにぶい黄褐色で、胎土には赤色粒子、金色雲母を含む。

7は磨滅により外面・内面とも調整は確認できない。不整長方形とみられる透孔を開けているが、本資料も1段あたりの孔数は不明である。凸帯は6同様突出度が高く、上辺・下辺・側面共に内彎しており、幅3.0cm、高さ



第2図 部位名称図

1.9cmを測る。色調は黄褐色で、胎土には赤色粒子、金色雲母を含む。

8も磨滅により外面調整は確認できず、内面は不鮮明であるが横・斜めのハケ調整がわずかに確認できる。凸帯は6・7と同様のタイプであるが、幅1.3cm、高さ1.7cmとやや小さい。色調はにぶい黄褐色を呈し、胎土には赤色粒子、金色雲母を含む。

9の外面は縦ハケ調整が確認できるが、内面は磨滅しており、指ナデと横ハケ調整がわずかに確認できる。透孔は逆三角形である。凸帯はM字形の貼り付けで、幅2.4cm、高さ1.3cm色調は同じくにぶい黄褐色、赤色粒子、金色雲母を含む胎土である。

10の外面には斜めのハケ調整が、内面は指ナデ後の横・斜めのハケ調整が確認できるが、いずれも磨滅により不鮮明であり、輪積痕が見られる。凸帯は断面台形で上・下辺の内彎が少なく、幅2.1cm、高さ1.0cmと小さい。色調は明褐色、胎土には金色雲母、小石を多く含む。

11～18は口縁部の破片資料である。11は有段口縁部の破片で、口径は35.2cm、磨滅を受けているが端部は横ナデにより面を持つ。色調は黄橙色、胎土には白色粒子、金色雲母を含む。

12～14は端部が大きく外側へ屈曲するタイプで、12は口径39.8cm、端部は面を持つが、横ナデによりやや湾曲している。外面は縦ハケによる調整、内面は横ハケと見られるが磨滅により不鮮明。色調は明褐色、胎土には赤色・白色粒子、小石を含む。13は口縁端部上面が内彎し端部は丸味を持つ。外面は縦ハケ調整が確認できるが、磨滅により内面の調整は確認できない。色調は橙色で、胎土に白色粒子を含む。14は口縁部が内傾した後屈曲しており、端部には面を持つ。外面は縦・斜めのハケ調整であるが磨滅・剥離により不鮮明、内面は一部に横・斜めのハケ調整が確認できるのみである。色調は明黄褐色、胎土には赤色・白色粒子を多く含む。

15・16の口縁部破片は、端部に横ナデによる明瞭な面を持ち、跳ね上げ状を呈する。15は口径48.8cmを測り、外面調整は磨滅により確認不可、内面は輪積痕が見られナデと横ハケがわずかに確認できる。色調は明黄褐色～明褐色で、赤色・白色粒子、金色雲母を多く含む胎土で

ある。16は口径51.6cmを測り、15同様外面調整は磨滅により確認できないが、内面はヘラナデ後横・斜めのハケ調整が確認出来る。色調は橙色で、胎土には赤色粒子、金色雲母、小石を多く含む。

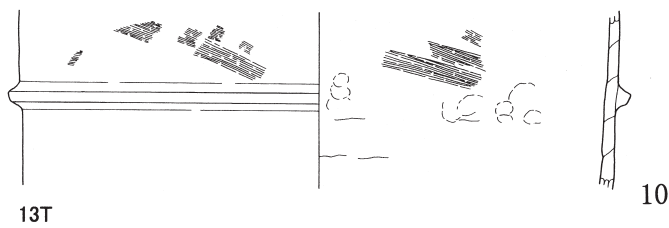
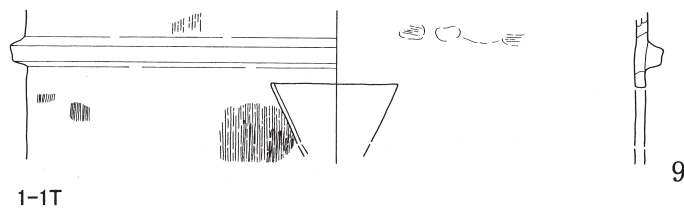
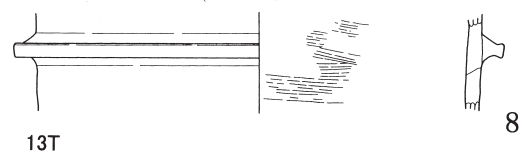
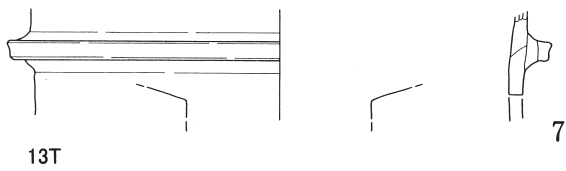
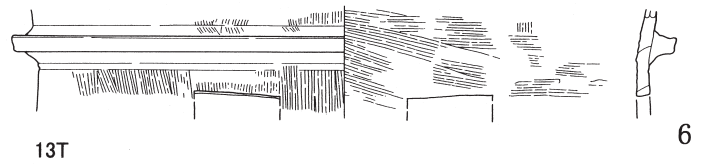
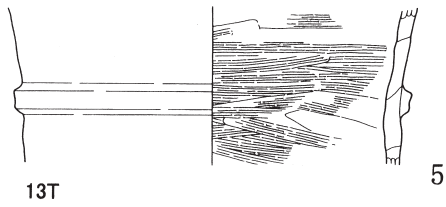
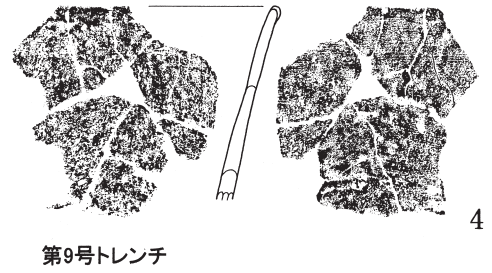
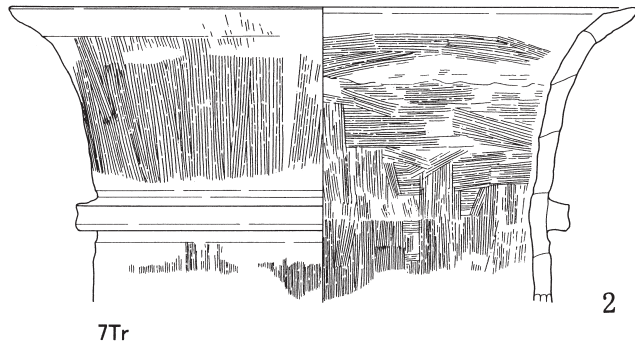
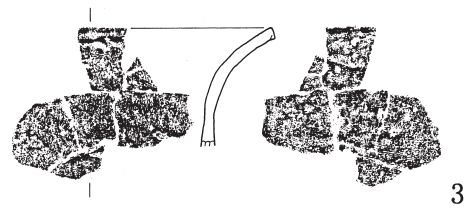
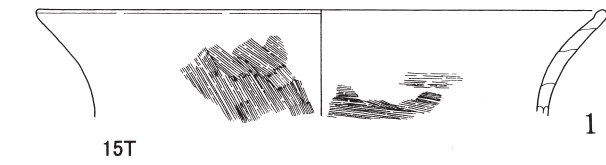
17・18も口縁端部に面を持つ小破片資料であるが、上方には突出せず垂下したタイプで、17は下方がやや厚く、18は尖る。いずれも磨滅により外面・内面の調整は確認できず、18は外面にわずかに縦ハケが残る。色調はいずれも橙色を呈し、胎土には白色粒子を含む。17には金色雲母も見られる。

19は15・16同様の口縁部を持つ大型の破片資料で、最上段の凸帯まで残る資料である。口径は43.7cm、外面は斜めのハケ調整、内面は横・斜めのハケ調整であり、凸帯の下に長方形の透孔がわずかに残っている。凸帯は鐔状に尖る特徴的なタイプで、横ナデにより上辺・下辺がわずかに湾曲しており、貼り付け面の幅2.5cm、高さ2.4cmを測る。色調は明黄褐色～黄褐色、胎土には赤色・白色粒子を含む。

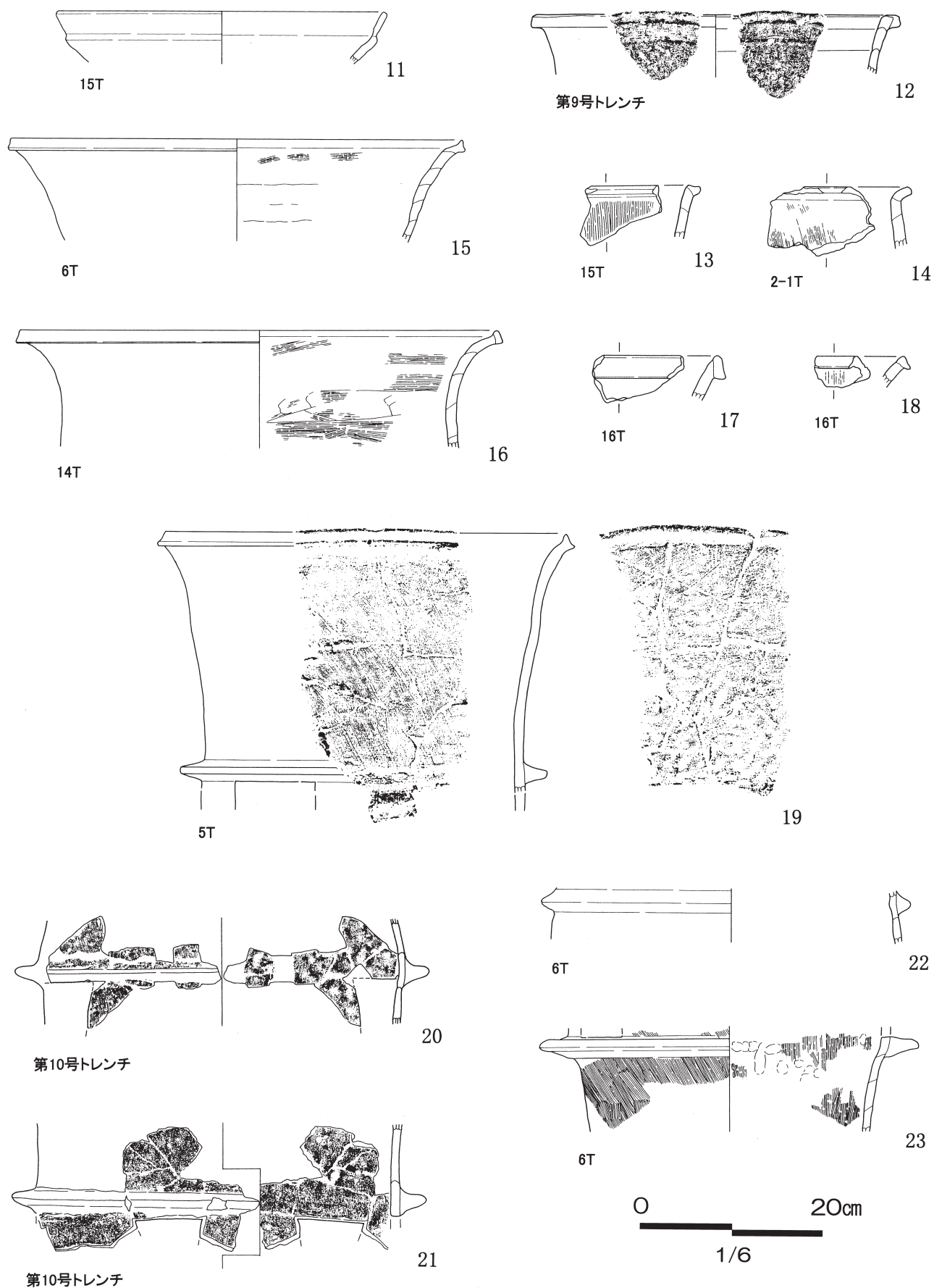
20～23は鐔状凸帯を貼り付けた胴部の破片資料である。20・21は同一固体の可能性があり、20は凸帯から上方がやや内傾している。ともに外面は縦ハケ、内面は指ナデ・オサエによる調整で、凸帯下に長方形もしくは逆三角形の透孔があるが、1段あたりの孔数は不明である。凸帯は19と同様のもので、幅3.1～3.2cmほど、高さ2.3cmを測る。色調は明褐色で、胎土には赤色・白色粒子、小石を含む。

22はやや内傾した胴部破片であるが、磨滅により外面・内面の調整は確認できない。凸帯は19～21に比べ突出度は小さく、幅2.5cm、高さ1.5cmを測る。色調は明褐色で胎土には赤色粒子、金色雲母を多く含む。

23はやや外傾した破片資料で、外面は斜めハケ、内面は指ナデ・オサエの後縦・斜めのハケ調整が見られ、凸帯の上に長方形とみられる透孔がある。凸帯は大型の鐔状のものを貼り付けており、幅2.3cm、高さ3.3cmと突出度が大きく、横ナデにより上辺がやや湾曲している。色調はにぶい黄褐色、内面の一部は橙色を呈し、胎土には赤色粒子、金色雲母を多く含む。



第3図 甲斐銚子塚古墳出土円筒形埴輪（1）
（1・6・9は筆者再実測、2・5・7・8・10は筆者実測、他は報告書より）



第4図 甲斐鉾子塚古墳出土土円筒形埴輪（2）
 （11・13～17・23は筆者再実測、19は筆者再トレース・一部加筆、18・22は筆者実測、他は報告書より）

(2) 朝顔形埴輪 (第5図)

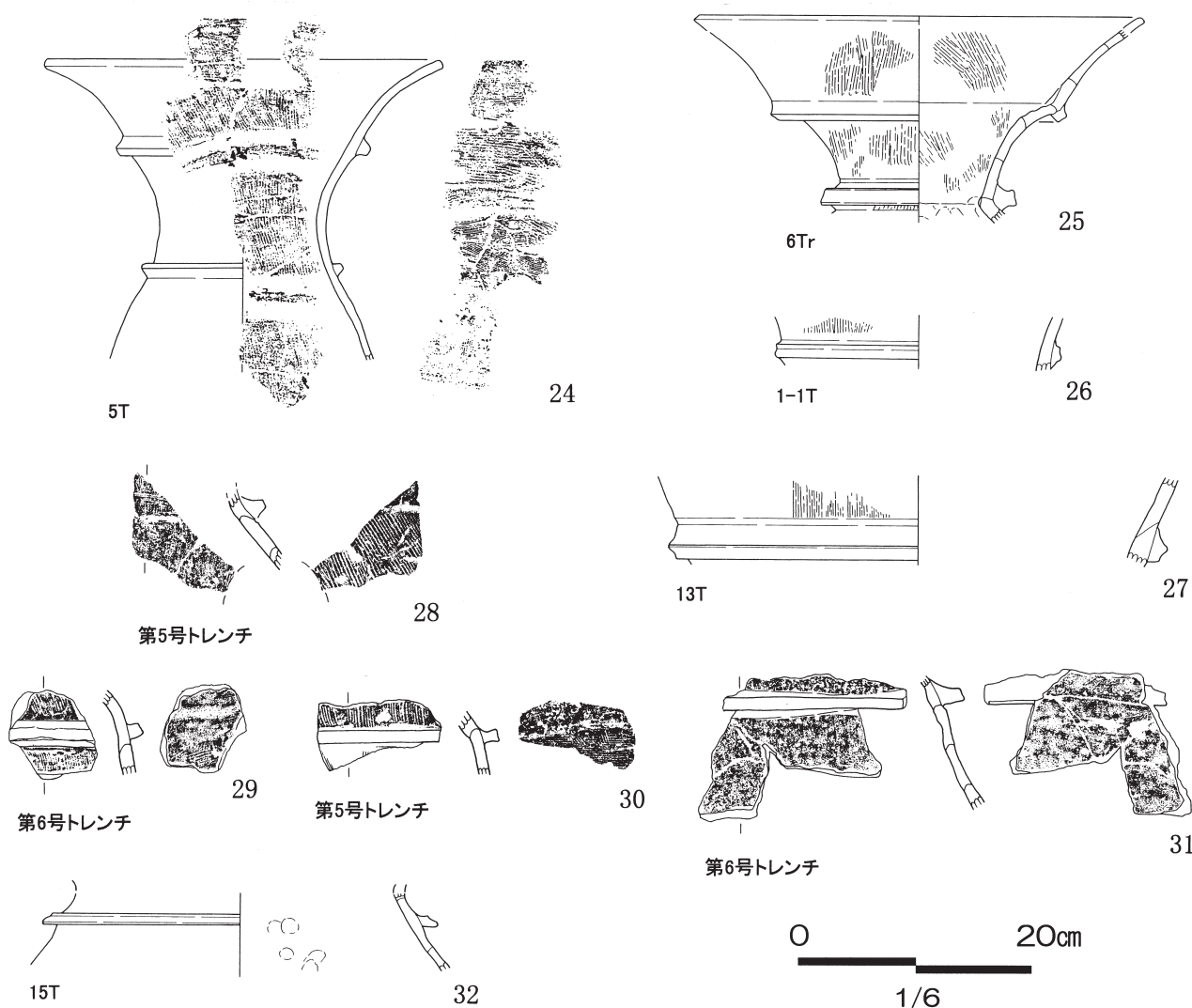
24・25は前稿でも取り上げた資料である。24は口頸部～胴部にかけて残る破片資料で、口径33.4cm、口頸部は屈曲せずゆるやかに外反し、段部は凸帯により二重口縁状にしている。口縁端部は横ナデにより面を持つ。胴部は肩が張らず細身の胴部になると見られる。器壁は薄く、外面は縦・斜めのハケ、内面は横・斜めのハケ調整で、胴部内面には縦ハケも確認できる。頸部・段部とも断面台形の小型の凸帯を貼り付け、幅1.3～1.6cm、高さ0.8～1.0cmほどを測り、頸部凸帯はやや下がった位置に貼り付けている。色調は明黄褐色～黄褐色、は胎土には赤色・白色粒子を含む。

25は口頸部の3分の1ほどが残る破片であるが、24に比べ口頸部の外反が大きく、明瞭な段部を持つ。口縁端部を欠損しているが、口径は推定で37cmほどが考えられる。外面は縦ハケ、内面は斜めのハケ調整が不鮮明なが

ら確認できる。凸帯は、段部のものは24同様幅1.5cm、高さ0.8cmの小型のものを貼り付けているが、頸部を巡るものは突出度が高く、上辺・下辺・側面共に内彎しており、幅2.3cm、高さ1.9cmを測る。色調はにぶい黄褐色、胎土には赤色・白色粒子、小石を多く含む。

26・27は頸部の破片資料である。磨滅しているが、外面調整は縦ハケが確認できる。頸部凸帯は断面M字形で、幅2.3cm、高さ0.9cmと突出度は少ない。色調は外面が橙色、内面はにぶい黄橙色で、胎土に赤色・白色粒子を含む。27は大型品の頸部と見られるが、26と同様磨滅により、調整は外面の縦ハケがわずかに確認できるのみである。器壁は1.2～1.5cmと厚く、M字形の頸部凸帯も比較的大きく、幅3.0cm、高さ1.3cmを測る。色調はにぶい黄橙色で、胎土に赤色粒子、金色雲母を多く含む。

28は頸部凸帯付近の破片資料で、凸帯は剥離により欠損している。外面は凸帯貼り付け部分に縦ハケ後の沈線



第5図 甲斐鉾子塚古墳出土朝顔形埴輪
(24は筆者再トレース、25～27・32は筆者実測、他は報告書より)

が確認出来るが、凸帯下の外面調整は確認できない。内面は斜めのハケ調整である。色調は明黄褐色で、胎土に白色粒子、小石を含む。なお、透孔があるが形状は不明である。

29・30は胴部（肩部付近）の破片で、29は外面縦ハケ、内面は横ハケと凸帯の裏側は指オサエ・横ナデ、30の外面は縦ハケ、内面は横ハケ後縦ハケによる調整。凸帯はいずれも小さく幅1.7cm、高さ1～1.2cm、30は上辺・下辺が内彎している。ともに明黄褐色を呈するが、29は胎土に白色粒子が多く、30は赤色粒子が多い。

31・32は頸部凸帯～肩部付近の破片資料と見られる。31の外面は縦ハケ、内面は横ナデによる調整で、凸帯は突出度の大きいもので、貼り付け面の幅2.5cm、高さ1.9cmを測る。色調は明黄褐色、赤色・白色粒子を含む胎土である。32は磨滅により外面・内面ともに調整は確認できないが、内面に指ナデ・オサエが見られる。凸帯は幅1.5cm、高さ1.3cm、上辺と側面が内彎しているが、下辺はほぼ水平である。色調は同じく明黄褐色、胎土には赤色粒子、金色雲母を多く含む。

3. 円筒形埴輪の型式分類

甲斐鉾子塚古墳出土の円筒形埴輪と朝顔形埴輪については、器壁の厚さや外面のハケ調整、凸帯の形状などを指標として、おおまかに区別できることは既に報告書にも記載されてきており、実際には円筒形埴輪、朝顔形埴輪それぞれに複数の型式が存在することは明らかである。一方、同じ二重口縁をもつ朝顔形埴輪と壺形埴輪については、口頸部までが復元できる場合において両者が判別できることは、前稿において述べたところである。

それでは、これまで見てきた形態的特徴をもとに、改めて円筒形埴輪、朝顔形埴輪を型式分類してみたい。しかしながら、はじめに述べたとおり、いずれも全体の形状を窺える資料は1点もなく、胴部の段数及び凸帯の条数は不明である。したがって、ここでも先学の研究成果を参考に（中井 1996など）、口縁部・口頸部から胴部にかけて、凸帯の特徴をもとに分類してみたい。

(1) 円筒形埴輪の分類（第6図）

まず、口縁部の形状であるが、全体の形状及び端部の調整をもとに、以下の5型式に分類する。

[A類] 胴部から逆八の字状に外反する口縁部。端部の形状をもとに、単純口縁のもの（A1類）、端部が尖るもの（A2類）、端部に面を持つもの（A3類）、端部を跳ね上げ、明瞭な面を持つもの（A4類）とする。さらにA4類は、胴部から緩やかに外反するもの（A4-1類）、大きく外反するもの（A4-2類）に細分する。

[B類] 胴部から直線的に開くもの。

[C類] 端部が大きく外側へ屈曲するもの。面を持つもの（C1類）、上面が内彎し端部は丸味を持つもの（C2類）、口縁部が内傾し端部が屈曲するもの（C3類）に細分する。

[D類] 端部が垂下するもの。

[E類] 有段口縁のもの。

次に、凸帯であるが、断面の形状から大きく4型式に分類する。

[a類] 断面がM字形を呈するもの。突出度が大きいもの（a1類）、小さいもの（a3類）、中間的なもの（a2類）に細分する。

[b類] a類に比べ突出度が大きいもの。上辺・下辺・側面が内彎するものが多い。

[c類] 断面が台形を呈するもの。上辺・下辺が内彎するものがある。

[d類] 鋸状に尖るもの。突出度が大きいもの（d1類）、小さいもの（d3類）、中間的なもの（d2類）に細分する。

これらのうち、口縁部A2類とA4-1類については、前章で紹介したとおり、胴部最上段の凸帯までが復元できており、口縁部と凸帯の組み合わせが明らかとなっている（第3図2・第4図19）。つまり、円筒形埴輪としてA2a1類とA4-1d2類の2点が、まずもって分類される。また、凸帯b類も数量的には多く、c類は後出的であることから、a類・b類・d類は円筒形埴輪の凸帯として採用されていると考えてよいであろう。

他の口縁部、凸帯についても、これらの組み合わせにより、さらに複数の円筒形埴輪の型式が想定される。しかし、実際には口縁部の形態を含め個体差が大きく、第3図2のように同一個体においても凸帯を挟んで上下の段で粗いハケと細かいハケでそれぞれ調整をしているものもある。また、器壁の厚いものと薄いものがあり、厚いものは貼り付く凸帯も大きい傾向にある。胎土（色調）もおおまかには、にぶい黄褐色、明黄褐色、橙色に分けられそうであるが、それをもって円筒形埴輪分類の指標とすることは、極めて困難と言わざるを得ない。

したがって、現状で判断できる円筒形埴輪A2a1類とA4-1d2類を、それぞれ円筒形埴輪Ⅰ類・Ⅱ類として、ひとまず大分類しておきたい（第8図）。

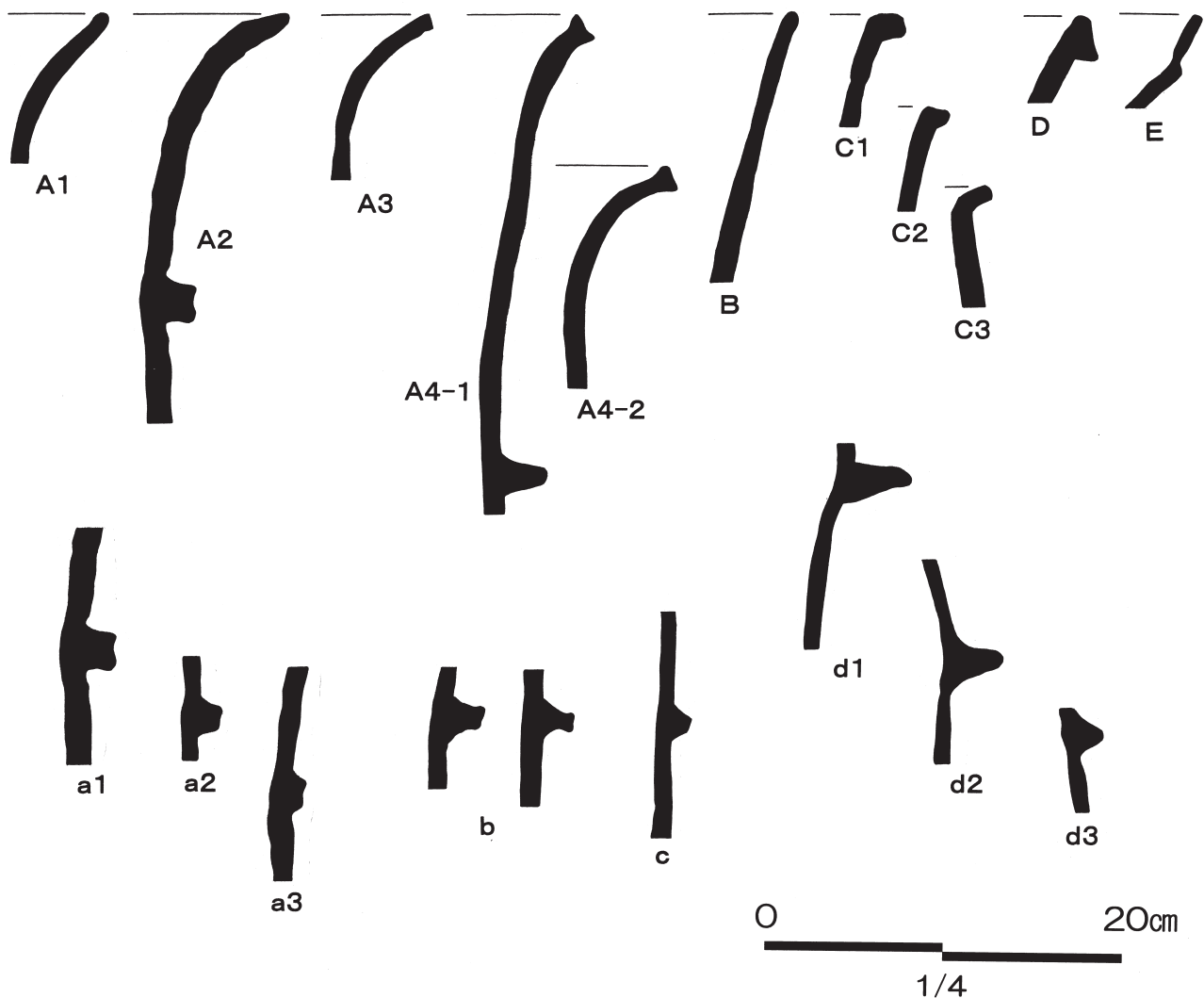
(2) 朝顔形埴輪の分類（第7図）

同様に朝顔形埴輪についても、口頸部まで復元可能な2点（第5図24・25）を基軸にして見てみたい。

[A類] 明瞭な段部を持ち、大きく外反する口頸部を持つもの。頸部は屈曲も明瞭である。

[B類] 明瞭な段部を持たず、屈曲せずゆるやかに外反する口頸部を持つもの。凸帯により段部及び二重口縁を表現している。胴部にかけても肩が張らず、頸部凸帯の位置も頸部より下に貼り付いている。

凸帯については、円筒形埴輪と同様に分類するが、明確に朝顔形埴輪の頸部、肩部とわかる資料が少ないこと



第6図 円筒形埴輪の口縁部・凸帯断面図

から、突出度の大小をまとめて分類しておく。

[a類] 断面がM字形を呈するもの。突出度が大きいもの(a1類)、小さいもの(a3類)、中間的なもの(a2類)に細分する。

[b類] a類に比べ突出度が大きいもの。上辺・下辺・側面が内彎する。

[c類] 断面が台形を呈する小型のもの。上辺・下辺が内彎するものがある。

なお、第1次整備事業に伴う調査で、側面に刻みのある凸帯が1点出土し報告されているが、断面は台形というより正方形であり、違う印象を受けるが、ひとまずc類に含めておく。

A類とB類では、形態の変遷、貼り付く凸帯から言えば、A類が古く、B類が新しいが、円筒形埴輪同様やはり個体差である。段部凸帯はどちらもc類であるが、これは壺形埴輪にも共通する要素で、頸部凸帯以下のものを指標とすれば、朝顔形埴輪Aa類、Bc類に分類される。b類と組み合う口頸部・胴部は不明であるが、円筒

形埴輪に特徴的な鏢状凸帯d類は確認できないことから、a類・b類・c類の凸帯が朝顔形埴輪に採用されていたことが考えられる。

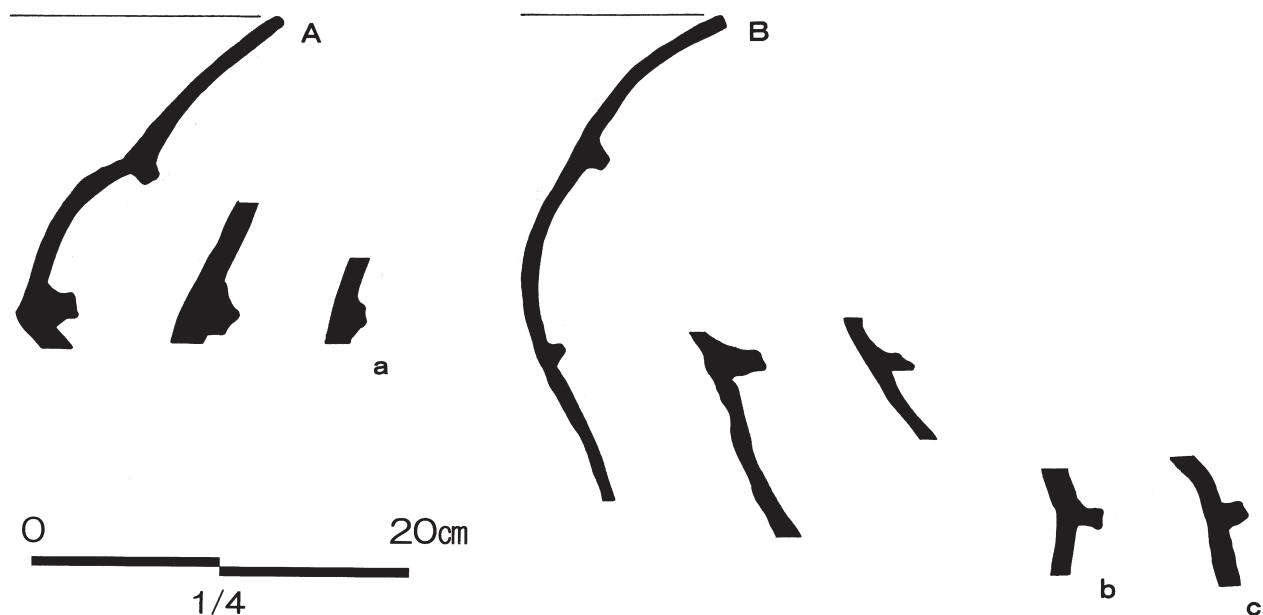
以上から、現状の口頸部及び胴部と凸帯から分類できる朝顔形埴輪Aa類とBc類を、それぞれ朝顔形埴輪Ⅰ類・Ⅱ類と大分類しておく(第8図)。

4. 甲斐の前期古墳と円筒埴輪

甲斐鉾子塚古墳出土の円筒埴輪について概観してきたが、ここでは前期古墳の編年とともにもう少し範囲を広げて見てみたい。

円筒埴輪の編年については、現時点でも川西編年の枠組みの中で捉えられており、諸属性の見直しや細分が行われているが(一瀬 2004など)、基本的には川西編年は有効であることは、多くの研究者が認めるところである(廣瀬 2011、犬木 2011など)。

甲斐鉾子塚古墳出土の円筒埴輪は、周知の通り川西編年Ⅱ期(4世紀中葉～後半)に位置づけられており(橋



第7図 朝顔形埴輪の口縁部・凸帯断面図

本 1980・保坂 1999・2001)、筆者の古墳時代甲斐編年(小林 1998・2000・2010)では古墳Ⅳ期が併行する。川西編年は、副葬品の組み合わせなどからも整合性が裏付けられており、本稿で取り上げている内容は、その再確認に過ぎないのかもしれないが、ここで甲斐編年の各段階設定について、最新の動向をもとに詳しく整理してみたい。

土器編年では、東海(赤塚 1990・1994ほか・北島 2000)、近畿(寺澤 1986・2002ほか・米田 1991・森岡・西村 2006・西村 2008ほか)、北陸(田嶋 1986・2008ほか)、駿河(渡井 1998・1999・佐藤 2014)との併行関係を示し、古墳では前方後円墳集成編年(広瀬 1990)、大賀克彦氏の広域編年(大賀 2002・2003ほか)や岸本直文氏の畿内編年(岸本 2011)、東海・甲信地域の編年(瀬川 2012)などを参考にし、さらに今回川西編年を加え修正した(第9図)。

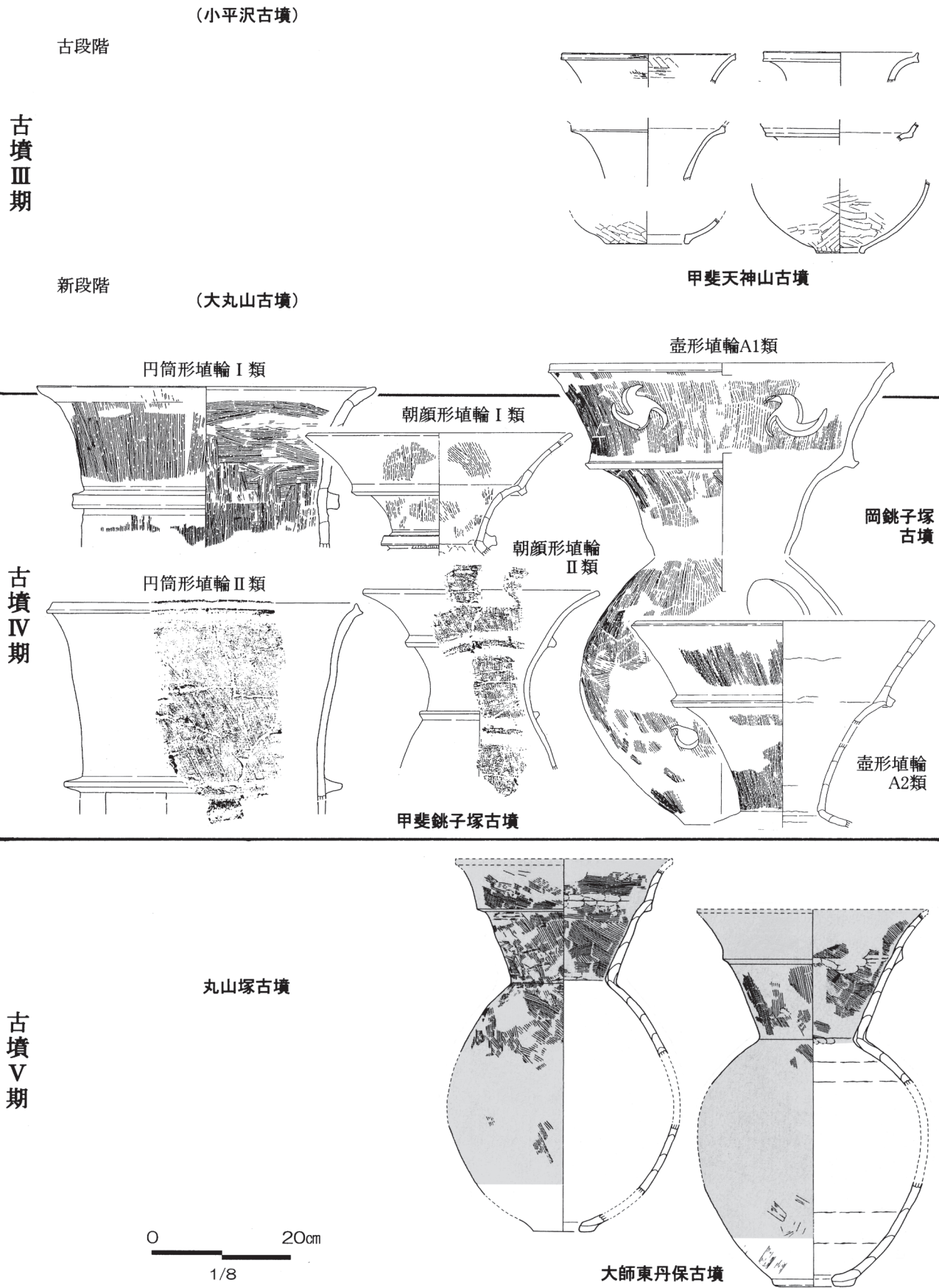
土器編年の併行関係では、廻間Ⅱ式3・4段階と布留0式が概ね併行すると考えられ(寺澤 2012)、この時期が3世紀中頃であり、この段階で奈良県箸墓古墳が出現することから、定点となる。併行する甲斐編年は古墳Ⅱ期の段階である。また、近年の理化学的年代測定法が高精度な体系になり、布留式の年代は3世紀後半から4世紀後半にかけての期間が有力と考えられており(西村 2011)、前期の後半、甲斐古墳Ⅳ期は松河戸Ⅰ式・布留式中段階新相～新段階にそれぞれ併行し、須恵器の出現時期を考慮すれば、4世紀第3四半期を下ることはない。したがって、廻間Ⅲ式、併行する甲斐古墳Ⅲ期はこれまでより20～30年ほど間延びすることになり、廻間Ⅱ式とⅢ式の境界を3世紀末とした。さらに、廻間Ⅱ式1・2段階に併行する甲斐古墳Ⅰ期も20～30年ほど引き上げら

れることになった。

弥生土器と土師器の境界、並びに前期から中期への画期の問題については、別稿で改めて取り上げることとし、この年代観をベースに中道古墳群を見てみると、まず甲斐天神山古墳について、出土した二重口縁壺(第8図)を検討した結果、甲斐古墳Ⅲ期中頃に明確に位置付けられることとなり(小林 2014a)、この段階は4世紀第1四半期頃になる。先行する前方後円墳の小平沢古墳は依然として十分な資料情報に恵まれないが、これまで通り古墳Ⅲ期古段階(3世紀末から4世紀初め頃)とする。埴輪のない大丸山古墳は副葬品等の研究成果から甲斐銚子塚古墳に先行し(宮澤 1994・2014)、甲斐天神山古墳との間に位置付けられ、4世紀第2四半期となる。

以上、土器編年を中心に中道古墳群の前期古墳4基について、実年代を再確認した。詳細に見れば、副葬品・土器(S字甕)・埴輪とすべて揃っている甲斐銚子塚古墳、土器が出土している甲斐天神山古墳(二重口縁壺)や小平沢古墳(S字甕)と、埋葬施設の構造や副葬品以外に時期が判断できる資料がない大丸山古墳とでは、根拠にしている年代の「物差し」に違いがあり、問題がない訳ではない。しかし、立地や墳形など、これまでの研究成果も考慮した上での年代観であり、前方後円墳集成編年の2～4期と川西編年のⅠ期とⅡ期の整合に課題があるものの、ここに示した併行関係は、現状では妥当なものと考えたい。

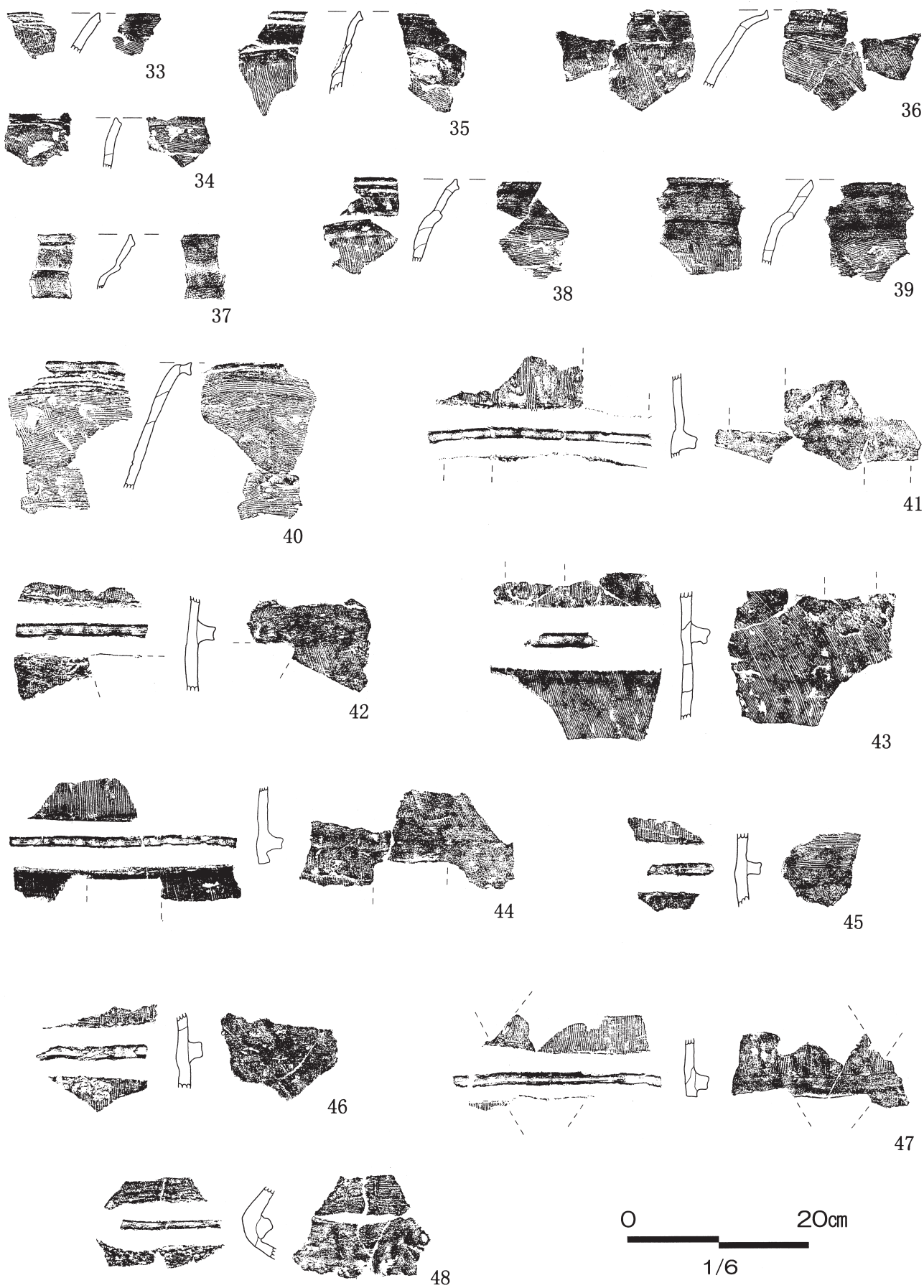
これらを踏まえ、再び円筒埴輪に戻るが、はじめに触れたように、橋本氏がかつて取り上げた論考において、甲斐銚子塚古墳と岡銚子塚古墳出土の円筒埴輪との比較検討が行われているが、岡銚子塚古墳ではその後整備事業に伴う発掘調査(伊藤 1995)においても円筒埴輪片が



第8図 甲斐地域における古墳時代前期～中期初頭の埴輪の変遷

	近畿			北陸		東海	駿河	甲斐	大賀編年					
	畿内第Ⅴ様式	庄内式期Ⅱ	庄内Ⅰ式	月影式	漆町Ⅲ群	廻間Ⅰ式	雌鹿塚Ⅲ式	弥生終末期	西日本		東日本			
200	古 古 新	庄内式期Ⅲ	庄内Ⅱ式	白江式	漆町Ⅳ群	4	雌鹿塚Ⅳ式		前方後円墳集成	円筒埴輪	前Ⅰ期	ホケノ山 芝ヶ原	西上免 高尾山 神門5号・4号 高部32号・30号	
250														庄内式
300	新段階	庄内式期Ⅳ	布留Ⅰ式		漆町Ⅵ群	3	大廓Ⅱ式	古墳Ⅱ期	1期		前Ⅱ期	箸墓 西求女塚 小松	弘法山 神門3号	
														古 古 新
	布留式	中段階	布留Ⅱ式	古府クルビ式	漆町Ⅷ群	2	廻間Ⅲ式	大廓Ⅳ式	新段階	2期	I期	前Ⅳ期	椿井大塚山 東殿塚 桜井茶臼山	象鼻山1号 神明山1号
350	新	布留式期Ⅱ	布留Ⅲ式	高島式	漆町Ⅹ群	4	大廓Ⅳ式	新段階	3期		前Ⅴ期	紫金山 妙見山	雨の宮1号 深長 親ヶ谷 森將軍塚 前橋天神山 藤本観音山 会津大塚山	
古 古 新														布留式期Ⅲ
400	新段階	布留式期Ⅳ	布留Ⅳ式		漆町Ⅻ群	1	松河戸Ⅰ式	中見代Ⅰ式	4期		Ⅱ期	前Ⅶ期	五社神 巢山 島の山 和泉黄金塚	倉科將軍塚 野毛大塚 太田天神山
	須恵器	布留式期Ⅳ	布留Ⅳ式		漆町Ⅻ群	1	松河戸Ⅱ式	中見代Ⅱ式		丸山塚 (72m)		中Ⅰ期	コナベ 津堂城山	倉科將軍塚 野毛大塚 太田天神山
						2	宇田Ⅰ式							

第9図 土器編年と墳墓の編年（小林 2014に加筆）



第10図 岡銚子塚古墳出土土円筒形埴輪・朝顔形埴輪（報告書より）

出土している（第10図）。この中では、本稿で分類した口縁部A 3 類（33・34）、A 4 類（35・36）、C 類（40）、E 類（37～39）が見られる。また、胴部破片（41～47）、朝顔形埴輪の頸部破片（48）に貼り付く凸帯については、いずれも a 類から c 類のものであり⁽³⁾、外面調整、長方形・逆三角形の透孔をもつことや出土土器からも、川西編年Ⅱ期—甲斐古墳Ⅳ期であることが改めて確認出来る（第11図）。このうち、有段口縁の口縁部E 類については、はじめに述べたとおり、従来は「器台系口縁」として「特殊器台系譜」の初期的要素をもつ円筒形埴輪として考えられていたが、畿内の埴輪構成との比較などから、現在では「地方的変容と古い要素との混交」として捉えられており（高橋 1994）、埴輪生産の系譜を一元的に畿内に追うことは難しいことも指摘されている（鈴木 2011）。その一方で、地方では埴輪の形態的・技術的情報が、古墳築造のたびに「中央直結の回路を通じて更新されるのが実態」であるとの見方もあるが（犬木 2011）、いずれにしてもその背景には、交通路を介したネットワーク（小林 2014b）による中央からの形態的・技術的情報とともに、「古墳の墳丘に埴輪を樹立する」という情報の共有が存在する。そこに周辺地域からの二次的伝播を否定することはできないだろう。

甲斐鉾子塚古墳は畿内的な王墓、岡鉾子塚古墳は在地的な首長墓であるとすれば（小林 2010）、埴輪製作に関しては、同じ甲斐古墳Ⅳ期に「同じ（墳形の）前方後円墳に埴輪を樹立する」という情報の共有のもと、埴輪製作が行われたことが考えられる。

また、甲斐鉾子塚古墳に続く中期初頭の甲斐の首長墓である丸山塚古墳（第9・11図）からも、量的には少ないが円筒埴輪片が出土している。口縁部の形態はA 3 類、A 4 類、E 類のものが見られ、凸帯はc 類が多い。これらも川西編年Ⅱ期に対比できるものであるが、築造時期は甲斐古墳Ⅴ期（4 世紀末から5 世紀初頭）であり、川西編年Ⅲ期併行の段階である。出土状況からも埴輪の樹立に積極的ではなかった（あるいは樹立されなかった）ことが窺えるが、畿内からの埴輪製作の情報が更新されなかったとすれば、この時期を「地域内埴輪体系の消滅段階」（風間 2008）と捉えることができる。さらにこのことは、「埴輪の有無は大和政権との関係を直接指し示す材料にはならない」（高橋 1994）とはいえ、少なからず大型前方後円墳築造停止とも連動するものと考えられ、以後中期前半にかけての円筒埴輪製作の一時的な断絶（保坂2001）に繋がることになる。

5. まとめ

甲斐鉾子塚古墳出土の円筒形埴輪、朝顔形埴輪については、それぞれ大きく2 型式に分類される。壺形埴輪に比べ、口縁部（口頸部）、凸帯にはバリエーションが存在し、円筒形埴輪Ⅱ類は鐔状の凸帯を持つ在地色の強いもので、詳細にはさらに複数の型式が存在する。しかし、大局的

には川西編年Ⅱ期の枠組みを逸脱するものではない。

甲斐の古墳前期の円筒埴輪生産においては、中央からの形態的・技術的情報とともに、周辺地域からの情報の共有などがあり、これらをもとに4 世紀後半（第3 四半期）の短期間に、壺形埴輪とともに在地において集中的に生産を行ったことが考えられる。その後、甲斐の円筒埴輪生産は極めて低調になり、丸山塚古墳に残存した後一時的に断絶し、壺形埴輪のみが大師東丹保古墳（保坂 1997）へと引き継がれる（第8 図）。

6. おわりに

甲斐鉾子塚古墳出土の円筒埴輪について、前項の壺形埴輪に引き続き、新旧の資料をもとに分析を行った。多くの破片資料を前に結果的に十分検討できたとは言えないが、東国屈指の大型前方後円墳に樹立・圍繞された埴輪群から、古墳時代前期における地方の埴輪生産の一樣相を確認できたと思う。今後はさらに周辺地域との比較・検討を行いながら、製作技法や地域差などにも目を向けていく必要がある。

註

- (1) 論題の「円筒埴輪」とは、ここでは「円筒埴輪」に「朝顔形埴輪」を含めたものを指しているが、通常両者を区別するために「円筒形埴輪」・「普通円筒埴輪」、「朝顔形円筒埴輪」などと呼ばれている。しかし、胴部の形態は同じであるものの、分類上朝顔形埴輪は壺形埴輪の一形態であることから（赤塚 2001・車崎 2004）、第2 章以降はそれぞれ「円筒形埴輪」「朝顔形埴輪」として進め、両者合わせたものを「円筒埴輪」と呼ぶことにする。
- (2) 前稿を含め、色調については『新版標準土色帖（2006 年版）』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）に基づき表記している。
- (3) 橋本文献（橋本 1980）にはd 3 類の凸帯片も掲載されている。

引用・参考文献

- 赤塚次郎 1990「考察」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 1994「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 1997「廻間Ⅰ・Ⅱ式再論」『西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 2001「壺形埴輪の復権」『史跡青塚古墳発掘調査報告書』犬山市教育委員会
- 赤塚次郎・早野浩二 2001「松河戸・宇田様式の再編」『研究紀要』第2 号 愛知県埋蔵文化財センター
- 伊藤修二 1995『山梨県指定史跡 岡・鉾子塚古墳』八代町教育委員会

土器 編年	須恵器	墳 墓									
		長坂・明野 須玉・菰崎	白根・若草 櫛形・甲西	豊富・三珠	中道	境川	八代	一宮・御坂	双葉・竜王 敷島・甲府	石和 春日居	山梨・塩山
250	古墳Ⅰ期				■ 上の平 1号墓(30m)				■ 塩部 1号墓 (19m)		
	古墳Ⅱ期	■ 坂井南 6次1号墓 (12m)		■ 上野 1号墓 (24m)	■ 上の平 37号墓(10m)				■ 榎田 2号墓 (11m)		
	古墳Ⅲ期	■ 坂井南 4号墓 (18m)			■ 宮の上 9号墓(9m)				■ チクヤ (11m)		
		■ 北村 1号墓 (17m)			■ 小平沢(45m)				■ 榎田 1号墓 (16m)		
300	古墳Ⅲ期	■ 北村 2号墓 (14m)			■ 米倉山B 1号墓 (19m)	■ 西原 SH10 (15m)		□ 亀甲塚 (25m) (墳形不明)	■ 榎田 4号墓 (13m)		■ 下西畑 1号墓 (14m)
		■ 大日川原 11号墓 (14m)			● 甲斐 天神山 (132m)				■ 桜井畑 1号墓 (18m)		■ 武家 1号墓 (10m)
	古墳Ⅳ期	■ 大日川原 4号墓 (12m)			● 大丸山(120m)				■ 塩部 SY03 (20m)		■ 下西畑 4号墓 (13m)
					● 甲斐鏡子塚 (169m)	■ 諏訪尻 1号墓 (19m)	● 岡 鏡子塚 (92m)		■ 桜井畑 2号墓 (28m)		■ 西田 1号墓 (12m)
400	古墳Ⅴ期	TG232 TG231	● 物見塚 (48m)		● 丸山塚(72m)	● 諏訪尻 1号墳 (30m)					
	古墳Ⅵ期	ON231	● 大師 東丹保 (36m)	■ 鳥居原孤塚 (25m)	(米倉山B10号土坑)		■ 竜塚 (55m)		■ 桜井畑 3号墓 (33m)		
	古墳Ⅶ期	TK73									
	古墳Ⅷ期	TK216									
	古墳Ⅸ期	ON46	● 寺部村附 第6 1号墓 (19m)	● 上野(20m)	● 東山南(B)2号墓 (26m)		● 盃塚 (25m)				
	古墳Ⅹ期	TK208	● 六科丘 (28m)	● 高部宇山平 (12m)	● 東山南(B)1号墓 (22m)	● 馬乗山 1号墳 (13m)	● 狐塚 (26m)	● 姥塚2号墓 (12m)		● 大蔵 経寺前 2号墳 (25m)	
	古墳Ⅺ期	TK23		● 王塚(61m)	● 東山南(A)K4号墓 (9m)	● 馬乗山 2号墳 (60m)	● 団栗塚 (30m)	● 姥塚 (4号墳 4号墓 (28m) (9m))		● 大蔵 経寺前 3号墳	
	古墳Ⅻ期	TK47		● 大塚 (50m)	● 岩清水 1号墓 (24m)						
500	古墳Ⅹ期	MT15		● 三星院1号 (45m)	● 表門神社(62m)						
		TK10			● 米倉山 無名墳(20m)		○ 莊塚 (28m) (墳形不明)		● 横根・桜井 39号墓 (11m)	● 大蔵 経寺山 15号墳 (12m)	
	古墳Ⅺ期	TK43	● おつき穴 (規模不明)					● 弾簀窟 (16m)	● 万寿森 (38m)		
		TK209	■ 鋳物師屋 (18m)	● 伊勢塚 (36m)	● 稲荷塚(28m)	● 口開塚 (規模不明)	● 地蔵塚 (35m)	● 姥塚 (40m)	● 加牟那塚 (45m)	● 平林 2号墳 (15m)	● 牧洞寺 (16m)
600	古墳Ⅻ期	TK217 古	● 穴塚 (10m)					● 長田 20号墳 (25m)	● お舟石 (18m)	● 狐塚 (20m)	● 稲荷塚 (17m)
		TK217 新	● 湯沢 2号墳 (10m)	● 上村 (10m)				● 経塚(12m)	● 中株塚 (28m)	● 笹原塚 3号墳 (6m)	
	古墳Ⅼ期	TK46			● くちやあ塚(10m)		● 御崎 (28m)	● 千米寺 大塚 (17m)	● 二ツ塚 1号墳 (22m)	● 寺の前 (20m)	
		TK48							● 竜王 2号墳 (14m)		
700	古墳Ⅽ期								● 双葉 2号墳 (28m)		

第11図 甲斐地域における墳墓の変遷 (小林 2014)

- 犬木努 2011「埴輪の編年②東日本の円筒埴輪」『古墳時代の考古学1 古墳時代史の枠組み』同成社
- 一瀬和夫 2011「円筒埴輪」『考古資料大観』第4巻 弥生・古墳時代 埴輪 小学館
- 上田宏範 1959「埴輪の諸問題」『世界考古学大系』第3巻 日本Ⅲ 平凡社
- 大賀克彦 2002「凡例・古墳時代の時期区分」『小羽山古墳群』清水町教育委員会
- 大賀克彦・堀大介 2003「凡例」『風巻神山古墳群』清水町教育委員会
- 大賀克彦 2013「前期古墳の築造状況とその画期」『前期古墳からみた播磨』播磨考古学研究集会実行委員会
- 置田雅昭 1977「初期の朝顔形埴輪」『考古学雑誌』第63巻第3号 日本考古学会
- 笠原みゆきほか 2008『銚子塚古墳附丸山塚古墳』山梨県教育委員会
- 風間栄一 2008「中部高地における大型円墳の様相」『前期・中期における大型円墳の位置と意味』東北・関東前方後円墳研究会
- 川西宏幸 1978・1979「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2・4号 日本考古学会
- 川西宏幸 1988『古墳時代政治史序説』塙書房
- 岸本直文 2011「古墳時代史の枠組み ③古墳編年と時期区分」『古墳時代の考古学1 古墳時代史の枠組み』同成社
- 北島大輔 2000「古墳出現期の広域編年―尾張低地部編年の提示、近畿・北陸地方との併行関係を中心に―」『S字甕を考える』東海考古学フォーラム三重大会事務局
- 車崎正彦 2004「総説 埴輪」『考古資料大観』第4巻 弥生・古墳時代 埴輪 小学館
- 小林健二 1998「甲斐における古式土師器の成立―3・4世紀の土器編年と墳墓」『専修考古学』専修大学考古学会
- 小林健二 2000「甲斐のS字甕を考える」『S字甕を考える』東海考古学フォーラム三重大会事務局
- 小林健二 2006「甲府盆地から見たヤマト―甲斐銚子塚古墳出現の背景―」山梨県立考古博物館
- 小林健二 2010「古墳時代における甲斐の地域社会―土器編年と墳墓の変遷―」『山梨県考古学協会誌』第19号
- 小林健二 2013「甲府盆地から見たヤマト（2）―甲斐銚子塚古墳出土の壺形埴輪―」『研究紀要』29 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 小林健二 2014a「甲斐の前期古墳をめぐる検討課題―土器編年から見た中道古墳群の位置付け―」『古代東国と畿内王権―甲斐中道古墳群の検討から―』山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター・甲府市教育委員会
- 小林健二 2014b「甲斐銚子塚古墳と甲斐の政権」『歴史読本』2015年1月号 株式会社KADOKAWA
- 近藤義郎・春成秀爾 1967「埴輪の起源」『考古学研究』第13巻第3号 考古学研究会
- 近藤喬一・都出比呂志 1971「京都向日丘陵の前期古墳群の調査」『史林』第54巻第6号 史学研究会
- 坂本美夫 1988『銚子塚古墳附丸山塚古墳』山梨県教育委員会
- 佐藤祐樹 2014「駿河における二重口縁壺の位置づけ」『東生』第3号 東日本古墳確立期土器検討会
- 鈴木一有 2011「松林山古墳と遠江の前期古墳」『黄金の世紀』豊橋市美術博物館ほか
- 瀬川貴文 2012「3地域の展開 ⑥東海・甲信」『古墳時代の考古学2 古墳出現の展開と地域相』同成社
- 高橋克壽 1994「埴輪生産の展開」『考古学研究』第41巻第2号 考古学研究会
- 田嶋明人 1986「漆町遺跡出土の編年の考察」『漆町遺跡I』石川県埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 2008「古墳確立期土器の広域編年 東日本を対象とした検討（その1）」『石川県埋蔵文化財情報』第20号 財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 2009a「古墳確立期土器の広域編年 東日本を対象とした検討（その2）」『石川県埋蔵文化財情報』第21号 財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 2009b「古墳確立期土器の広域編年 東日本を対象とした検討（その3）」『石川県埋蔵文化財情報』第22号 財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 2011「古墳確立期土器の広域編年 東日本を対象とした検討（その4）」『西相模考古』第20号 西相模考古学研究会
- 田嶋明人 2013「4期の画期をめぐって」『東生』2号 東日本古墳確立期土器検討会
- 田嶋明人 2014「二重口縁壺にみる推移と変革（上）」『東生』第3号 東日本古墳確立期土器検討会
- 寺沢薫 1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県立柏原考古学研究所
- 寺沢薫 2002「布留0式土器の新・古と二・三の問題」『箸墓古墳周辺の調査』奈良県立柏原考古学研究所
- 寺沢薫 2012「7. 高尾山古墳の評価をめぐる二・三の問題」『高尾山古墳発掘調査報告書』沼津市教育委員会
- 中井正幸 1996「昼飯大塚古墳周辺の埴輪系譜」『美濃の考古学』創刊号 同刊行会
- 西村歩 2008「中河内地域の古式土師器編年と諸問題」『邪馬台国時代の摂津・河内・和泉と大和』香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館
- 西村歩 2011「土師器の編年③近畿」『古墳時代の考古学1 古墳時代史の枠組み』同成社
- 橋本博文 1976「東国への初期円筒埴輪波及の一例とその史的位置づけ」『古代』第59・60合併号 早稲田大学考古学会
- 橋本博文 1978「甲斐における在地首長制の成立とその展開」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』24

- 橋本博文 1980「甲斐の円筒埴輪」『丘陵』第8号 甲斐丘陵考古学研究会
- 橋本博文 1984「甲府盆地の古墳時代における政治過程」『甲府盆地—その歴史と地域性—』地方史研究協議会 雄山閣
- 早野浩二 2011「土師器の編年 ④東海」『古墳時代の考古学1 古墳時代史の枠組み』同成社
- 平塚洋一 2014「最新の研究成果—天神山古墳—」『古代東国と畿内王権—甲斐中道古墳群の検討から—』山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター・甲府市教育委員会
- 広瀬和雄 1992「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成 近畿編』山川出版社
- 廣瀬覚 2001「茶臼山形二重口縁壺と前期古墳の朝顔形埴輪」『立命館大学考古学論集Ⅱ』立命館大学考古学論集刊行会
- 廣瀬覚 2011「埴輪の編年②西日本の円筒埴輪」『古墳時代の考古学1 古墳時代史の枠組み』同成社
- 保坂和博 1997『大師東丹保遺跡Ⅳ区』山梨県教育委員会ほか
- 保坂和博 1999「埴輪」『山梨県史』資料編2 原始・古代2 山梨県
- 保坂和博 2001『大塚古墳』山梨県教育委員会
- 宮澤公雄 1994「甲斐曾根丘陵における古墳時代前半期の様相—東山・米倉山地域の再検討を通して—」『山梨考古学論集Ⅲ』山梨県考古学協会
- 宮澤公雄 2014「甲斐の前期古墳をめぐる研究史」『古代東国と畿内王権—甲斐中道古墳群の検討から—』山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター・甲府市教育委員会
- 森岡秀人・西村歩 2006「古式土師器と古墳の出現をめぐる諸問題—最新年代学を基礎として」『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター
- 森原明廣・守屋文子 2005『銚子塚古墳附丸山塚古墳』山梨県教育委員会
- 山根洋子 1992「第5節 出土埴輪」矢島宏雄編『史跡森將軍塚古墳』更埴市教育委員会
- 吉岡弘樹 2002『銚子塚古墳附丸山塚古墳』山梨県教育委員会
- 米田敏幸 1991「土師器の編年Ⅰ近畿」『古墳時代の研究』6 雄山閣
- 渡井英誉 1998「大廓式土器小考—大廓式の画期とその展開—」『庄内式土器研究』XVI 庄内式土器研究会
- 渡井英誉 1999「中見代式土器小考—大廓式土器から中見代式土器へ—」『東国土器研究』第5号 東国土器研究会